

## 5月、梅雨のひまわり



同仁病院 桑江 紀子

梅雨時、大ぶりの雨粒に重そうに頭をもたげる20本余りのひまわりの群れが窓から目に入る。

Cancerで逝った友人が、庭のひまわりを見て〈癒される〉とつぶやいて以来、小ぶりのひまわりの種を2月頃には1袋全部裏庭に蒔いて、春には花が咲くのを心待ちにするようになった。

数本切って、花瓶にさすと、雨のせいで、花弁が一樣でなく、ゴッホの絵の〈ひまわり〉のようにあちこちに曲がっている。

昨年の東京都美術館にあるレストランでの1コマを思い出す。

晩秋の、窓正面の外には1本の銀杏の木が立っていた。

突き抜けるような空の蒼を背景に葉は金色に色づき、木の根元にはかなりの量の金色の銀杏の葉が散乱していて、それを4つ切りの窓枠が切りとっている。

〈きれいですよね〉

見とれている私に傍らのウェイトレスが話しかけてくる。

〈去年はもっときれいでした。後で写真を見せて差し上げますね〉

今しがた見た絵の余韻が静かな熱気として胸に残って、購入した画集を取り出してテーブルの上に広げる。

「ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢」で、ゴッホの絵の中で、初めて目にしたものがあって、デフォルメされた太い縁取りの黒の線とグリーンの色のみで構成されたスケッチ風の〈農家〉、風車と菜園は青と、緑とほんの少しの赤とで構成されている穏やかな筆致の〈モンマル

トル〉、そうして、明るい色彩の、花をつけたアーモンドの枝ぶりを、青空を背景に描いた〈アーモンドの木の枝〉(弟テオとその妻に息子の誕生を祝って贈ったという)。

優しい家族に囲まれ、ゴッホの人生には幸せな時もあったのだと安堵する。

〈ほら、これです〉

気が付くと先ほどの笑顔のウェイトレスが立っている。

我に返って、彼女の手中の携帯をのぞくと、さらに見事な銀杏の木が映っていた。

銀杏の黄金色と、ゴッホの色彩が自分のうちで重なるのを感じながら、1杯のコーヒーを飲みほした。

5月、窓から見える家の裏庭に咲くひまわりは、雨に打たれ、風に揺れながら、命のはかなさと人の心の暖かさを想起させる。

